

被災高齢者に居場所を

大船渡・末崎の「ハウス」運営住民



居場所ハウスで一緒にのり巻きを作るフィリピンの訪問団と末崎地区の住民。住民らは高齢者の居場所づくりについて発信する＝14日、大船渡市末崎町

18日、提言を公表

比の参加者、事例学ぶ

大船渡市末崎町で住民交流拠点「居場所ハウス」を運営する住民らは18日、仙台市で開催中の国連防災世界会議のフォーラムで、東日本大震災後の高齢者の居場所づくりについて発表する。年配の人を災害弱者ではなく、復興過程で頼られる「役割」を担う存在として、孤立防止につながる地域づくりを発信する。14日は同会議に参加するフィリピンの一行が見学を訪れ、交流しながら大船渡での実践事例に触れた。



フィリピン、米国などから約10人が訪問。地元のお年寄りら約20人が出迎えた。のり巻きを一緒にづくり、郷土料理の磯花すし、ひつまみでもてなした。

居場所ハウスは、2013年6月、米国企業や、首都ワシントンのNPO法人「ibasho」（清田英巳代表）などの支援で、古民家の部材を活用して整備。高齢者がNPO法人を立ち上げ、当番

制で運営する。

普段は気軽に立ち寄れるカフェや朝市などのイベントを開き、住民の孤立防止につながっている。子どもたちにはお菓子作りやひな人形など地域文化を伝承し、高齢者と子ども、親世代をつなぐ役割も果たしている。

18日は、運営に携わる4人が、仙台市青葉区の東北大川内北キャンパスで開かれるフォーラムで発表。災害時に柔軟に対応できる地域は、高齢者を含むあらゆる世代の人々のつ

ながりが必要という視点で、同ハウスの活動などを紹介する。清田代表は13年に甚大な台風被害に見舞われたフィリピン・レイテ島のオルモックでも居場所づくりを企画。同ハウスの紀室拓雄管理人(73)、鈴木軍平館長(70)が今年1月、現地在を訪れたこともあり、フィリピンからの訪問につながった。

「日本が災害からどのように立ち上がったのか」「高齢者と若い人が集まる場をどうつくるか」を母国に持ち帰りたいと語る。同ハウスは今後、災害公営住宅が付近に完

成することから、集まること、食事できる場の整備、イベント参加への呼び掛けも計画する。鈴木館長は「震災で生活環境が変化している中、居場所ハウスは高齢者の心のケアになっていることを伝えたい」と意欲を示す。

まちの健康を守る

東日本大震災から4年

東日本大震災は11日、発生から4年となった。被災地では依然、不便な生活が続く。出かける目的や場所、地域社会の喪失が心身の負担として蓄積していく。平成27年度から、医療や介護、予防、コミュニケーションを生活圏域で活性化する「地域包括ケア」が本格化する。人々に、少しでも元気になってもらいたいと願うボランティアや専門職の取り組みを追う。



岩手県大船渡市 岩手県沿岸南部に位置し、人口約3万9000人。平成26年度の高齢化率は33.3%。基幹産業は水産業。東日本大震災では、死者340人、行方不明者79人、建物被害は5566世帯に及んだ。避難者は最大8700人超。

① 大船渡市の居場所ハウス

「タコ丼できたよ」「ちよっと休んでいったら」
明るい声が飛び交い、笑顔がはじける。2月下旬、岩手県大船渡市・末崎地区の住民交流拠点「居場所ハウス」で朝市が開かれた。野菜、焼き鳥、地元で採れたホタテ…。隣接する陸前高田市の名物「タコ丼」も並ぶ。地域の産品を中心に、約10団体が出展した。月1〜2回開かれる朝市には、地区内外から多くの人が訪れる。買い物をする人もいれば、おしゃべりを楽しむ人もいる。



居場所ハウスに通うようになり元気になった村上セツさん(左)。懐かしい知人に会うことも増えた—岩手県大船渡市

居場所ハウスは25年6月、末崎地区の高台にオープンした。高齢者の知恵と経験を生かし、多世代交流の場にもうのが狙いだ。地域住民らによるNPO法人「居場所」創造プロジェクト」が運営している。ハウスの中にはキッチンがあり、椅子とテーブルが並ぶ。お茶を飲んで自由におしゃべりする「目的がなくても立ち寄れる」場所だ。踊りや歌の教室などさまざまなイベントを開催する。

地域の再生が課題

大船渡市は27年度、復興へ向け転機を迎える。被災者の移転先となる災害公営住宅の8割以上が27年度中に完成。高齢化が進み、住まいが変わるなかで地域コミュニティをどう形成するか、が課題だ。

末崎地区には27年度、災害公営住宅72戸が完成、防災集団移転による戸建て用の宅地135戸のすべてが引き渡される予定だ。地区の公民館長で、同NPO法人の近藤均理事長は「災害公営住宅に引越した高齢者をどう支え、地域をどう再生していくかが課題だ」と指摘する。

震災後、末崎地区でも孤独死が発生した。災害公営住宅などへの転居を機に、引きこもったり、孤独死したりするケースが懸念されるなか、人と人をつなぐ居

場所ハウスに期待がかかる。「ここに来るのに、目的はいらない。足を運ぶ高齢者も自然と増えた」(近藤理事長)

出合いの場

近くの市営住宅に住む村上セツさん(92)は、イベントのたびに居場所ハウスに足を運ぶ。震災前は末崎地区で1人暮らし。被災して車で20分ほど離れた仮設住宅に転出した。知り合いもなく、精神的なダメージで引きこもった。だが、昨年6月、末崎地区の市営住宅に入居でき、居場所ハウスに通い始めた。生活は一変した。知り合いとの再会。外出を楽しみ、懐かしい知人との交流で明るい気持ちが生まれた。

村上さんは「みんながセツさんって声をかけてくれる。ここに来る人は家族みたい」と笑顔を見せる。

医療や介護の人材に限られるなか、住民も介護予防に関わるまちづくりが始まる。居場所ハウスでは、毎日顔を出す人が姿を見せなければ、スタッフの様子を見に行くこともある。居場所ハウスの鈴木軍平館長は「まず、家から出てここに

来てもらう。交流が心身のケアにつながっていく」。

交流から始まる心身のケア